COLUMN

# 研究会たより

## 第9回 情報処理学会の終焉？

萩谷 昌己（東京大学／調査研究運営委員会委員長）

春の全国大会は3月12日から14日まで，東京電機大学の鳩山キャンパスで開かれるが，13日の15:00から17:00まで，「情報処理学会の終焉？－IPSJの在り方－」というショッキングなパネル討論が予定されている．副会長の村岡洋一先生が仕掛け人かつ司会をされていて，パネリストは，土居範久先生，戸田巌元会長，松岡聡先生，それから，（おいら，ではなくて）私である．

村岡先生は，日頃から，副会長職を務めながらも情報処理学会のような日本の学会なんて，なくてもいいんじゃない，という逆説的な（ひょっとすると本音の）意見をしばしば述べる方なので，かなり本質的なところで議論が進むと期待している．

私自身，何を喋るかは全然考えておらず，そうこうしているうちにパネルの日がやってきて仕方なく当たり触りのないことを言うことになるのが目に見えているので，この文章を書かねばならないという状況に乗じて，少しは考えてみようと思った次第である．結論は，情報処理学会を終焉させるのは，そう簡単ではなさそうである，ということである．

実は，全国大会では，次の日の14日にも興味深いパネル討論とシンポジウムが計画されている．1つは「産官学におけるIT研究の在り方－産官学連携による独創的研究開発と地域活性化－」というパネル討論，もう1つは「情報および情報関連分野のアクレディテーション」というシンポジウムである．これについては，また後で触れる．

さて，「情報処理学会の終焉」ということであるが，要するに，「グローバルスタンダード」の時代に純国産の学会など，必要ないんじゃないか，ということである．

学会運営検討委員会の場でもしばしば村岡先生にふっかけられた議論であるが，ACMやIEEEがあれば，純国産の学会は必要ないのではないかと．その議論には，まず，日本語の論文を発表する場は必要か，という問題が含まれている．学問分野が成熟して国際化すれば，やがて論文は英語でのみ書かれるようになる，というのがそのときの私の意見であった．だが，よく考えてみると，そう簡単な問題ではないように思えてくる．つまり，日本では英語は公用語とはなっておらず，政治も行政も裁判も教育も日本語でのみ行われている．この国のそのような言語環境を反映して，（かなり偏見があるのだが）文系の学問分野では主として日本語で発表が行われる．

情報処理の分野は，数学などとは違って，概念的なことも重要である．たとえばプログラミング言語にしても，言語の構文や意味は数学的に議論することができるが，その設計哲学というべきところでは，概念的な文系的側面を無視することはできない．この国の言語環境が変化しない限り日本語で発表が行われる学問分野が残るとすると，情報処理に関連してもそのような分野が存在し続けると考えられる．

さらに，学会の役割は研究発表の場を提供するだけではない．その1つは，他の研究分野と競争して，たとえば政府の補助金をぶんどる圧力団体としての役割である．そしてもう1つは技術者の教育という役割である．奇しくも，14日のパネル討論とシンポジウムは，この2つの役割に関するものとなっている．前々回に「学会というコミュニティへの帰属意識」ということを述べたが，上の2つの役割は運命共同体としての学会の役割である．学会がそのような運命共同体になってしまえば，学会の存在意義は決してなくならない．歴史の長い理系の学問分野では，そのような学会の在り方が一般的ではないかと思う．

ただし，現在の情報処理学会はそのような運命共同体としては非常に弱体である．つまり，現在の情報処理学会の問題点は，運命共同体になりきれず，日本語の発表の場を提供するという，かなり危うい（がなくなりそうにない）役割の上に成り立っていることである．

さて，最後に考えたいのは，もし仮に情報処理学会が終焉を迎えるとして，どうやって学会を終わらせるか，という問題である．これこそが，実は，大問題なのではないかと思う．私自身，いくつかの研究会の終焉に携わったが，いずれも統合という形をとった．

最近，研究会の研究報告が電子化され，過去の研究会で発表された論文がすべて電子的に閲覧できるようになった．これは学会の非常に大きな財産となっている．これをどのように活かすべきかは別の機会に考えることにして，もし情報処理学会が終焉を迎えたとき，そのような財産をいかにして遺産として将来に残すか，それこそが大問題である．（はぎゃ）

（平成14年2月11日受付）